



・生型検査

粘土で作成した生型を検査した。焼き縮みを考慮し、仕上がり寸法より1割ほど大きくつくる。

①は、本堂隅棟の鬼瓦。②は、鬼瓦の珠文飾りの補足。珠文に足をつけ、穴に押し込んで圧着する。鬼瓦は、寸法・形状はもちろんだが、表面の加工痕跡など細部もよく観察し、ヘラ磨きの方向などにも留意した。



③、④は軒瓦の瓦当。③は本堂軒丸で、④は鐘楼軒平（滴水型）のもの。

当初軒丸はやや縦方向に長い傾向がある。これが意図的なものか、焼成時の変形など偶発的なものかは不明だが、軒の雰囲気を損ねないように、この傾向を踏襲して製作する。



また鐘楼軒平（滴水型）は、瓦当の範（はん）に土が入りきっておらず、文様が浅くかすれてしまっていたものが多かった。こちらは、今回の施工に当たっては、範にきちんと土を押し込み、瓦当文様をきれいに打ち出すこととする。



・隅軒平について

⑤は、隅軒平瓦用の台のサンプル（瓦宇所蔵）。

隅軒平瓦は、振り及び反りがあるため形状が複雑なので、裏甲を取付けてから、隅部分の形状を模した台をつくり、それに合わせて隅軒瓦を製作することとした。



⑥



⑦

・鬼瓦の検査

⑥は、前回検査した本堂鬼瓦の生型を焼成したもの。高さ、幅とも誤差は2mm以内で、申し分なく完成することが出来た。

⑦は本堂背面、二の鬼瓦の生型。二の鬼は、下端がすべて中古に欠き取られているため、足元を復元した。

⑧は求聞持堂の鬼瓦で、古材が1点のみで、それも欠失部分があったため、まず欠失部分について検討し復元した（写真左）。これを参考に生型を製作したが、検査では、目元や口元の張り具合など、細部に少し修正を加えた。



⑧



⑨

・本堂瓦当修理について

当初軒丸瓦は、瓦当の端部が欠けているものがあった。施工上は問題がないので、欠けた部分のパーツをつくって接着し、化粧直しをして再用することとした。

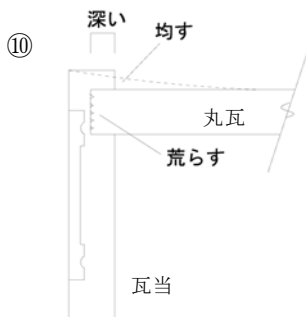
⑨は、欠けた部分と、そこに埋め込むパーツ。

この欠けた部分をよく観察すると、軒丸瓦の製作方法と、問題点がわかった（図⑩）。

瓦当と丸瓦の接着は、瓦当裏面に掘った溝に丸瓦の木口を押し込んで周辺を均す一般的な方法である。

しかし福勝寺の当初軒丸瓦では、瓦当裏面の溝を深く掘り過ぎたため、瓦当側に残された部分が薄くなり、この部分が欠けやすくなったものと考えられる。

制作者の意図としては、瓦当と丸瓦がはずれ難いように考えたのであろうか。



⑩